

鏡があった。紫色の布で覆われていた姿見の鏡は埃っぽい室内とは対照的に綺麗に光を反射している。その光源は僕の持っている懐中電灯だ。

「先輩、やっぱり何の変哲もない鏡ですよ」

僕は鏡に背を向け、入口近くを陣取っている女性に話しかけたが、彼女は鼻で笑っただけだった。

どうしてこんな事になっているのだろうか。音楽準備室の一番奥にある鏡が噂の学校七不思議の内の一つらしいが、わざわざ日曜の真昼に学校に忍び込んで鏡を音楽室に移動させて、暗幕を閉じて怪しげな儀式をする価値があるのだろうか。いや、そもそも僕には関係の無い話だった。

「いつまで被害者ぶってるつもり？ちゃんと約束しただろうに。貴方が想いを馳せている女の子との仲を私が取り持ってあげるから、私の新聞作りに手伝って欲しい。ただ、それだけじゃないか」

「文面だけだと、ただそれだけですけどね。『君、あの子の事好きなんでしょ？』といきなり話しかけられては、断ったら意中のあの子にあらぬ事を伝えにいくと言われたんですよ。これは立派な脅迫です」

家を出る時から大変だった。両親に何処かに出掛けると言うのだからまず制服では怪しまれるし、さらに学校に潜入するには私服を教師陣に咎められぬ様に慎重に期す必要があった。さらには音楽準備室の奥に辿り着くまでに邪魔な物を移動させたりと重労働。薄いグレーのシャツはさらに灰色となり、空気が淀んでいるせいで喉が埃っぽく大層気分が悪い。

「それでも頷いたのだから仕事はきっちりして欲しいものだ」

「今さら七不思議なんて都市伝説以下のゴシップに興味を持つ人間なんていると思いますか？」

勿論、貴方以外で。嫌味を存分に醸し出しながら彼女に訊ねる。しかし、彼女はこちらがあっけらかんとするぐらいに簡単に認めた。

「そりゃいないだろうね。だって、精神的に発達した高校生になってまで七不

思議を追うだなんて馬鹿みたいだ。でもね、気になってしまったものは仕方ないさ。どれ、君にも興味を持ってもらおう。……そうだな、なんで七不思議なんてあるんだろうね？」

「そんな事を急に聞かれてもわかりませんよ。まず本当に七つもあるのかどうかも疑わしい」

懐中電灯を学習机の上に置き、机とセットの椅子に座った。しかし、彼女はそちらから訊ねてきたというのにこちらの言葉に中々反応しないのでいらいらが募る。彼女はゆっくりとピアノの椅子に座り、こちらに向かって足を組みかえてようやく話し始めた。

「君の着眼点はそこそこ良い方だ、25点かな」赤点かよ。

「まず七不思議と謳っているが、こちらの情報網を駆使しても七つはなかった。昔から変わらずに伝わっているのはこの鏡と、トイレで泣くような声がするというつまらない話だけだ」

人使いの荒い粗暴な彼女だが、容貌だけ見れば美人の部類に入る。それ故に、つつい短いスカートから覗かせる瑞々しい太ももが気になってしまう。彼女はこちらの目線に気づいているが、特に気にした様子もなく滔々と語る。

「学校の怖い話というものは基本的に七不思議として括られるが、実際は七つもない。小さい噂程度ならあるのかもしれないが、高校生になってまでその噂を会報に載せたりはしないだろう。——だからこそ、私はこの鏡の信憑性を疑っているんだ」

「……どういう事ですか？」

考えを巡らせても全く意図が掴めない。そんな僕の様子に彼女は嘆息して、足を地面につけた。魅惑の太ももタイムは終わったようだ、残念。

「答えばかりを求める生活を送り続けていれば、君のように思考力が鈍るのだろうね。……まあ、いいや。面倒だから簡潔に言う。根強くこの噂が残っているのであれば、必ず伝承通りの現象が周期的に発生しているのではないか」

「つまり、未だにわーわーぎゃーぎゃー言われているから、その所以がどこかにあるのではないかという事ですか」

「物凄く噛み砕いた言葉だが、まあ概ね合っているのだから文句は言えないね。で、件の鏡はどのようなものかは事前に説明しているだろ？」

その言葉に僕は渋々と頷いた。無駄な説明をさせてヤル気を失わせる事も出来るが、それ以上に彼女からのストレスが酷そうだから断念。

曰く、暗い部屋でこの鏡を見た者は、その者の未来が見えるという。暗ければいいようで、それは夜でも暗幕の閉じた昼下がりでも発現する。しかし、その未来というのはとても不吉なもので、やけに生々しい未来を見せてくれるらしい。だからこそ、こうして音楽準備室の奥に幽閉されては物好きが引っ張り出してまた恐怖して封印する。その繰り返してこの話は生まれたようだ。

「しかし、さっきから全く変わり映え無しなんですけど、どういう事です？」
「そりゃ、私がずっと後ろで眺めていたからだろう。こういう不思議は一人で体験するものだ。一人だけにいるという事は、その場で起きた現象は全て自分の主観でしか物事を捉えられない。物事を常識と照らし合わせて条理を立てるには、他の観測者が必要となる。例えとして何か小さな物音が聞こえたって他の人がそれを否定すれば、それは自分だけでは証明できない。あらゆる観測を駆使しない限りね」

長々と彼女は語るが、言いたい事は理解できた。

「だったらとっとと部屋から出てください。この部屋で僕一人がこの鏡を眺めてればいいんでしょう」

「ほう、さすがにその程度は理解できるか。失敬、失敬。無駄に説明してしまう所だったよ。でもこれには訳があってだな——」

「その訳とは、まず二人では見れない事だけを確認してから一人で実験をさせる。何も出なければそれまでで、何か変化があればその変化の要因は必ず一人でなければならない。その証明がしたいだけでしょ。この埃まみれの脳みそでも理解できたので時間を無駄にしない為にもとっとと部屋から出ていってください」

君はよく脅迫している先輩に向かってずばずばと物言う事が出来るね。どこか楽しんでいるかのように呟きながら彼女は外から扉を閉めた。

辺りに静寂が支配する。防音壁に囲まれた室内では全ての音が吸い込まれそ

うな錯覚を覚える。それは密閉した室内での息苦しさによる心臓の鼓動すらも、どこか遠くに行ってしまうかのようだ。

改めて鏡に懐中電灯を向ける。鏡に映っているのは無表情を装うとする自分の姿だけだ。それだけのはずなのに、何故だろうかこちらを見定めているかのような居心地の悪さを感じていた。

背中に汗がどっと噴き出し、熱を急に失って寒さすら感じ始める。人は怖い体験をして肝を冷やすと言うが本当だったのか。そうやって別の事を思考する事で何かから逃げようとした。しかし、

——目の前の現象を認識したのなら君だけでは逃れられないさ。

その一節が脳裏によぎった瞬間、視界が急激に揺らめいた。それでも視線は鏡から外せない。

鏡は緑色の光を放っていた。そして未来が見えた。



二人の女性がいた。近くに好きな女の子、そして遠くにはあの憎き女性。勿論、今回の騒動を起こしたあの新聞部だ。

鏡に映った僕は好きな女の子と色んな所をデートする。登下校を一緒にしたり、買い物に付き合ったりするぐらいの簡単なお付き合い。それでもお互いに笑い合っている素敵な光景だ。——それなのに、僕は映った僕の顔の裏を理解してしまっていた。あの笑顔の裏に隠れているのはつまらなさだった。

平凡な会話をして、未来へ向かって歩く日々。普通ときめくはずの触れ合いすらもどこか物足りなさを感じている。物足りなさを感じる原因は遠くからこちらを俯瞰しているあの先輩だ。あの先輩との会話は、暴力的で僕の尊厳を水底へと突き落とすかのように酷い事を平然と行われる。そして雨の日に泥まみれになったり、何故か田植えを手伝わされたり。将来起こりえるその光景が見ている今の自分に突き刺さる。

未来は加速する。僕は女の子と結婚していた。周りには祝福してくれる両親や友人、職場の同僚がいた。でも、それでも、僕はつまらなさを変わず笑顔で塞いでいた。

「未来というのは過去を基にして現在の選択によって生まれるビジョンである」

幸せで満ちているはずの空間の外側から声が響く。その声が先輩だと気付いた瞬間に、周囲は暗闇に包まれる。何にも無い空間に僕と先輩は立っていた。

「つまり、未来を生むのは結局のところ過去である。その過去で悔いてしまった事を残せば、それは現在を通して全て歪んでしまう。だからこそ私は後悔しないように周りを振り回す。そうやって振り回す方法を考える事が私の楽しみである」

「自分だけが幸せになればいいと言っているのか？ それではこの現代社会において生き残る事は出来ない。確かに悔いの無いように過去を充実させたのであれば、現在に自信を持って生きる事が出来るだろう。でも、それは孤独なんだ。だから人は媚びて、どこかで妥協して生きるんだ」

自分でも何を言いたいのだろうか。彼女の言う事を反射的に否定してしまいたい。その衝動に駆られては、偉そうで空虚な言葉を連ねてしまう。だからこそ、彼女は堂々とそこに言葉の刃を突き立てる。

「媚びて妥協した結果が君のあの笑顔さ。遠くから見ればハッピーエンドだが、近くで見ればノーマルエンド。君自身がノーマルエンドと感じてしまっている限り、その主観が揺らぐ事はない。揺るがないが故にバッドエンドでもあると言い換えられるね」

「だったら何をすればいいんだよ！ どうやってやればさ、先輩から見ても僕から見てもハッピーエンドに見える！？」

激昂した。ここは夢の中なのだとか割り切って言いたい事をぶちまけた。どうせ具合が悪くなって倒れてこんなへんてこな夢を見ているに違いない。

しかし、彼女はそんな自分に対して優しげな笑顔を浮かべて辛辣な言葉をぶつけた。

「それを考えるのが君なのさ。私の主観なんて気にする必要はない。何が必要で、その為は何を成し遂げればいいのか。人は道に迷える羊であるとともに、

自由という武器に戸惑う生き物だ」

「またいつものように難解な言葉を連ねては僕を馬鹿にするんだろうね」

自分に自信が無くなった僕を見て彼女はいつも通り意地の悪い笑顔を浮かべた。

「わかっているじゃないか。そうやってわかる事で、経験を過去にして、その過去で自分を確かな存在にする。外の世界は主観一つだけでは揺らぐだろうが、その主観が元々揺らいでいては生きていけないのさ」

僕はその言葉に何故か安堵してしまっていた。臉が少しずつと閉じてこの幻想を終える。

「おやすみ、そしておはよう」

意識の底に沈んだ時、二方向から声が聞こえた様な気がした。



目を覚ますと、そこは燦々と太陽の光が降り注ぐ音楽室だった。暗幕は開かれ、あの鏡は見当たらなかった。

しかし、いつの間に横になっていたのだろうか。先程、何か変な夢を見たような気がするのだがうまく思い出せない。そして何故だろう、倒れているはずなのに頭が優しく包まれている。

ふと見上げる。先輩がこちらを見ていた。

「どうだい、好きな彼女がいるのにこうやって膝枕をしてあげている私の寛容さは」

「……とても身に沁みます」

ゆっくりと起き上がって先輩に色々と訊ねた。しかし、わかった事は先輩が数分経たない内に気になって扉を開けたら僕が倒れていて、いつのまにか鏡に布がかけられた状態であった事ぐらいだ。僕の質問に答えた先輩は雪崩のように質問を僕に浴びせた。が、うまく答える事はできなかった。

「で、何があったかは話す気はないと君はそう仰られる？」

「まだ頭がぼんやりとしているせいで、うまく言葉にできないんですよ」

自分でも馬鹿な事を言っていると思ったが、先輩は意外にもあっさりと身を

引いた。

「まあいいさ。君のあられも無い姿を写真に収めたから、十分な収穫さ。あ、データは既に自宅のパソコンに送付済みだから、これからも存分に働いてくれ」

不意打ちの爆弾投下が為された。

「おい、あられも無い姿ってなんだ」

見事なクラウチングスタートで逃げる先輩は一瞬足を止め、楽しげに僕に言った。

「だったら現在を知っていけ。何だったら私の過去でも調べて弱みを握るのもいい。まあその時には臍の右下に黒子がある事を、大仰でそれでいてこっそりと学校中に広げてあげよう」

「どこまで見たんだよ!？」

慌てて追いかけてしようとするが、先輩の姿は見当たらない。

つまらないはずの日曜の昼が特別な過去になっている事を僕はこの時知らなかったのだ。